

聘焉、冬、徐伐莒、莒人來請盟、穆伯如莒、泄盟、且爲仲逆、及鄆、陵、登城見之、美、自爲娶之、仲請攻之、公將許之、叔仲惠伯諫曰、臣聞之、兵作於內爲亂、於外爲寇、寇猶及人、亂自及也、今臣作亂、而君不禁、以啓寇讎、若之何、公止之、惠伯成之、使仲舍之、公孫敖反之、復爲兄弟如初、從之、

【通釋】 穆伯が莒から妻を迎へた、戴己といふ、文伯を生んだ、その姉の聲己が惠叔を生んだ、そのうち戴己が卒した、また莒から新に妻を迎へようとして結婚を贈つた、莒人はまだ聲己がをるといふて辭退した、さらばとて襄仲のために結婚を贈つた、冬、徐が莒を伐つた、莒人が來て盟ひを申し出た、穆伯が莒

に往つて盟に列座し、なほまた襄仲のために妻迎へをした、鄆陵まで來たところで、城に登つてその女を見た、美人であつた、よつて自分が貰ひうけた、襄仲が立腹して之を攻めようとした、文公が許可しようとした、叔仲惠伯が諫めていふやう「やつがれが承はりまするに、國內で合戦の起るのを亂と申し、國外から攻め寄せるのを寇と申すのこと、寇は禍が人の身の上にも及ぶことであるが、亂はただただおのれ一身の難儀と相成ること、御座る、然るにただ今、臣下が亂を起すのを御前がおさし止めなさらぬ、これぞ寇をわれに案内致すの道理、いかなる思召から左様な事をなされます、といつた、文公はその言葉に従つてさし止めた、惠伯が二人に仲直りをさせた、襄仲は莒の女を娶らぬことにし、公孫敖は之をかへすことにして、もともと通りの從兄弟の親しい仲にさせた、二人はその意見に従つた、

【一】穆伯は公孫敖である、【二】襄仲は公孫敖のいとこに當る、【三】莒が魯に救援を求めたためである、【四】鄆陵は莒の邑である、襄仲の娶らうとする女はこの地に住してゐた、穆伯はここに來て、女の容色を窺ひ見たのである、【五】

叔仲惠伯は叔牙の孫である、【六】寇に於いては禍の及ぶところ他にあつて、我のみでない、亂に於いては禍の他に及ぶことなく、すべて我にのみあるが故に、亂は特に警戒して之を避けねばならないの意である、【七】しかも穆伯はその女を忘れかねて、つひにその女のもとに出奔した事は明年の傳に見える、

○晉、郤缺言於趙宣子曰、日衛不睦、故取其地、今已睦矣、可以歸之、叛而不討、何以示威、服而不柔、何以示懷、非威非懷、何以示威、無德、何以主盟、子爲正卿、以主諸侯、而不務德、將若之何、夏、書曰、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、勿使壞、九功之德、皆可歌也、謂之九歌、六府三事、謂之

九功、水火金木土穀、謂之六府、正德、利用、厚生、謂之三事、義而行之、謂之德禮、無禮不樂、所由叛也、若吾子之德、莫可歌也、其誰來之、盍使睦者歌吾子乎、宣子說之、

【通釋】 晉の郤缺が趙宣子にいふやう、「さきにわが國と衛とは睦しい仲ではなかつたので、その土地を取つたので御座います、しかし、ただ今は睦しい間ゆゑ、お返しなされるべきかと存じます、一體、叛いた場合に討たねば威力の見せどころがなく、服した場合にはやさしう致さずば、情のかけどころが御座いませぬ、威力もなければ、情もないとなつたら、どうして德を見せることが出来ませう、德が無かつたら、どうして諸侯の長となることが出来ませう、そこもとには正卿として諸侯の支配を致される御身分であ

りながら、おん徳をお見せなさうとはなさらぬ、一體どう致す思召で御座います、夏書に『賞もて心をひきしめ、威もて罪を責めただし、九歌もて勸め勵して、折角の功を崩さないやうにさせる』とも申してをりまする、九つの功はいづれもほめたたへて歌にも詠めるもので御座れば、之を九歌と申します、六府と三事、これを九功と申します、水火金木土穀、これを六府と申します、徳を正しうし、民の便利を多くし、生活を幸福に致す、これを三事と申します、この三事を筋道のかなふやうに行ふのを徳禮と申します、禮が無ければ樂しみがなく、樂しみがなければ自然叛き離れるやうにも相成りませう、然るに、そこもとのおん徳はまだ以て歌にうたふまでには相成りませぬ、従つて誰あつて歸服致しませうぞ、何故に、睦しい者が歸服致して、おん徳を歌ふやうになさらうとは致されませぬぞ、宣子は之を聞いて、げにもと思つた、

〔一〕 日衛不睦、日は往日である、さきにと訓ず、〔二〕 衛の地を取つたことは元年の條に見える、〔三〕 夏書は尙書の虞書大禹謨篇である、〔四〕 戒之用休、休は美である、

之を褒めて賞を與へることである、人にして善行をなせば獎勵のために、賞を與へる、かくすれば、その人はなほ進んで之を行ひて怠ることがない、〔五〕 戒之用威、董は督である、罪あれば之を責めただして之を刑することをいふ、〔六〕 勸之以九歌、勿使壞、人はいかに努力するやうに心掛けても、さうまで永續きはしない、故に往日なし得たる九功の歌をくりかへして歌ふ、歌うては舞ふ、かくして元氣を恢復して、また以前の成功を續け、その成功を壞滅させない、〔七〕 六府、財用の由つて出づる所を府といふ、水火金木土穀は財用の出づる藏のやうなものであるから府といふのである、〔八〕 正徳とは道徳がその中を得て正しいやうにすること、〔九〕 利用、民の用を利すること、舟車その他民の便利を計ることをいふ、〔一〇〕 厚生、民の生活の餘裕あること、衣食住その他に對して十分の供給をなして満足させることをいふ、〔一一〕 來年、衛に土地をかへすことの傳である、

〔經〕八年、春、王、正月、

○記事がなくとも正月と記載するのが例である、

夏、四月、

○夏のはじめの月なるが故に、記事なくとも記載すること

正月の場合と同斷、

秋、八月、戊申、天王崩、

秋、八月戊申の日、周の襄王が崩御された、○傳はこれに附隨して、魯の公孫敖の不埒な事件を記してゐる、

冬、十月、壬午、公子遂會晉、趙盾盟、

于衡雍、

冬、十月壬午の日、公子遂が晉の趙盾に會して衡雍の地で盟つた、○傳はその理由に就いて書してゐる、

乙酉、公子遂會雜戎、盟于暴、

乙酉の日、公子遂が雜戎に會して暴の地で盟つた、○傳は專擅の處置なるに拘はらず、何故に公子遂と書いたかを説明してゐる、

公孫敖如京師、不至而復、丙戌、奔莒、

公孫敖が京師に往つた、そこに往き着かぬうちに中途から引きかへした、丙戌の日、莒に奔つた、○傳はその間の消息を詳述してゐる、

各蟲、

稻蟲が発生した、○傳は無い、

宋人殺其大夫司馬、宋司城來奔、

宋人がその大夫司馬を殺した、宋の司城が魯に奔つて來た、○傳はそれ等を繞る事實を記し、また何故に官名を以て書いたかを説明してゐる、

〔傳〕八年、春、晉侯使解揚歸匡戚

之田于衛、且復致公壻池之封、

自申至于虎牢之竟、

【通釋】 八年、春、晉侯が解揚をして匡戚の田を衛にかへさせた、なほまた公壻池の封地なる申から虎牢の境までをかへした、

〔一〕 解揚は晉の大夫である、〔二〕 匡戚之田、匡はもと衛の邑であつたが、中頃鄭に屬してゐた、今、晉侯が鄭をしてその地を衛にかへさせたのである、晉が戚を取つたことは元年の條に見えてゐる、〔三〕 公壻池之封、公壻池は公壻池氏であらう、その地名によつて氏に名づけたものであらう、杜註は公壻池を晉の君の女壻の池といふ事の意に解してゐる

る、〔四〕これは前年、郤缺が趙宣子に申出でたことの實現されたのである。

○夏、秦人伐晉、取武城、以報令狐之役。

【通釋】夏、秦人が晉を伐つて武城を取つた、これで令狐の役の仕かへしをしたのである。

〔二〕令狐の役に秦軍の敗れたことは七年の條に見える。

○秋、襄王崩。

【通釋】秋、襄王が崩御せられた。

〔一〕これは公孫敖が周に往つて弔する事の傳である。

○晉人以扈之盟來討、冬、襄仲會晉、趙孟盟于衡雍、報扈之盟也、遂會伊維之戎、書曰公子遂、珍之也。

【通釋】晉人が扈の盟の折の不行届を理由として魯を討つた、冬、襄仲が晉の趙孟に會して、衡雍の地

で盟つたのは、扈の盟の償ひをしたのである、それからすぐに伊維の戎と會した、春秋に公子遂といつたのはこれを國の寶としたのである。

〔一〕文公が後れて來て間に合はなかつた事をいふ、春秋には文公が扈で盟つた事になつてゐるが、實は盟はなかつたのであらう、盟つたら、之を討つ理由が無くなる筈である。

〔二〕趙孟は趙盾である、〔三〕衡雍は鄭の地である。

〔四〕報扈之盟、報は報償、之が償ひをして詫びたことをいふ、〔五〕伊維之戎は伊水雒水の間に在る戎をいふ。

〔六〕襄仲は伊維の戎が魯を伐たうとすることを知つた、そこで衡雍の盟の復命をせず、直に戎と會して盟つたのである、專擅の行爲は之を春秋に記録するに當つて、その族を去つて貶意を示すべきであるに拘はらず、公子遂と書いたのは、よく國難を避け得た點を褒めて、その專擅を咎めないからである、珍之の珍は珍寶の意である、杜註は更に丈夫一度境を出た以上は事苟くも社稷を安んじ國家を利する場合は專擅の處置をなしてもさし支へが無いともいひ添へてゐる。

○穆伯如周弔喪、不至、以幣奔莒、從己氏焉。

【通釋】穆伯が周に往つて天子の喪を弔ふ筈であつ

たが、そこにまゐらずに、贈り物の品々を持つたなり莒に奔つて、己氏のもとに身を寄せた。

〔一〕春秋に如京師不至而復、丙戌奔莒とある、不至而復は途中から引かへしたのである、傳はその點を明にしてゐる、己氏は前に襄仲との間に紛糾を生じたために莒にかへした女の家である、穆伯はその女の美しさを忘れかねて、かかる不届千萬な事をしたのである。

○宋襄夫人、襄王之姊也、昭公不禮焉、夫人因戴氏之族、以殺襄公之孫孔叔、公孫鍾離、及大司馬公子卬、皆昭公之黨也、司馬握節以死、故書以官、司城蕩意諸來奔、效節於府人、而出、公以其官逆之、皆復之、亦書以官、皆貴之也。

【通釋】宋の襄夫人は襄王の姊であつた、昭公がこ

の方を鄭重にあしらはなかつた、夫人は戴氏の族の手をかりて、襄公の孫の孔叔、公孫鍾離と大司馬公子卬とを殺した、これ等はいづれも昭公一味の者であつた、司馬官は節を握り詰めたままに死んだ、故に春秋に官名を以て書いたのである、司城蕩意諸は魯へ奔つて來た、この者は節を藏の係に渡してから國を出た、昭公がその者を本官の待遇で迎へ、やがてその屬官までをもと通りにした、蕩意諸も亦官名を以て春秋に書いたのは、いづれも之を貴んだためである。

〔一〕襄夫人は昭公の嫡祖母である、〔二〕司馬握節以死、節は符節である、蓋し軍兵催促の證符である、官人之を君より受けて預り持つてゐる、司馬卬は死してもなほ節を放さない、これ即ち死してなほ君命を廢せざる者である、〔三〕

效節於府人、司城官である蕩意諸が之を持参したなり奔らなかつたのは、君の任命を尊重するためである、即ちよく自己の職責を守るものであつた、〔四〕公以其官逆之皆復之、公は宋の昭公である、其の官とは司城の本官待遇を以て魯から宋に迎へることである、皆とは蕩意諸及びそれと共に出奔した屬官をいふ、ここに昭公が蕩意諸等を迎へたのは今年の事でない、後のことであるが、附記したのである、杜註

は公を魯の文公とし、文公がその態度を賞して禮遇し、更に宋公に請うて、おのおのが歸國し得るやうに計つたのであるといつてゐる。

○夷之蒐、晉侯將登箕鄭父先都、而使士穀梁益耳將中軍、先克曰、狐趙之勳、不可廢也、從之、先克奪蒯得田于董陰、故箕鄭父先都士穀梁益耳蒯得作亂、

【通釋】夷の蒐に於いて晉侯が箕鄭父と先都とを上軍に昇任させ、士穀と梁益耳を中軍の將とさせようとした、先克が「狐偃と趙衰の功勳をお棄てなされてはなりませぬ」といつた、侯はその意見に従つた、その後、先克が董陰に在る蒯得の田を横取りした、故に箕鄭父、先都、士穀、梁益耳、蒯得が騷亂を起した、  
〔一〕六年の條に見えてゐる、〔二〕將中軍、將は精しくは將佐、今、將の中に佐を含めていふのである、〔三〕狐趙之勳、狐偃と趙衰とは文公諸國流浪の折に最も多く功績を

立てたからである、〔四〕侯は箕鄭父、先都をそのままにし、士穀、梁益耳を中軍の將佐としないで狐偃の子の射姑、趙衰の子の盾を中軍の將佐としたのである、〔五〕七年に晉が秦軍を董陰で防禦したことがあつたが、そのどさくさ紛れに奪つたのである、〔六〕明年、先克殺害事件のための前書きである、

〔經〕九年、春、毛伯來求金、

九年、春、毛伯が魯に來て金を請求した、○傳はその非禮なること、また毛伯が王使といはない理由を説いてゐる、

夫人姜氏如齊、

夫人姜氏が齊に往つた、○傳は無い、歸寧したのである、

二月、叔孫得臣如京師、辛丑、葬襄王、

二月、叔孫得臣が京師に往つた、辛丑の日、襄王の葬に會した、

晉人殺其大夫先都、

晉人がその大夫先都を殺した、○傳は八年傳の先都士穀等の陰謀記事と相俟つてその處分の理由を説いてゐる、な

秋、八月、曹伯襄卒、

秋八月、曹伯襄が卒した、○傳は無い、

九月、癸酉、地震、

九月癸酉の日、地震があつた、○傳は無い、

冬、楚子使椒來聘、

冬、楚子が椒をして魯に挨拶に來らせた、○傳は椒の態度の傲慢と之に關する魯の大夫の評言とを録してゐる、

秦人來歸、僖公成風之襪、

秦人が魯に來て僖公成風の襪をおくつた、○傳はその禮にかなふ事を記してゐる、

葬曹共公、

曹の共公を葬つた、○傳は無い、

〔傳〕九年、春、王正月、己酉、使賊殺

先克、乙丑、晉人殺先都、梁益耳、

【通稱】九年、春、王曆の正月、己酉の日、賊をして先克を殺させた、乙丑の日、晉人が先都と梁益耳とを殺

ほ梁益耳を殺したことをいひ添へてゐる、

三月、夫人姜氏至自齊、

三月、夫人姜氏が齊から至つた、○傳は無い、廟に告げたので記録したのである、

晉人殺其大夫士穀及箕鄭父、

晉人がその大夫の士穀と箕鄭父とを殺した、○傳はその理由を晉人殺其大夫先都の場合に於いて示してゐる、なほ蒯得を殺したことをいひ添へてゐる、

楚人伐鄭、

楚人が鄭を伐つた、○傳はその動機と結果とを説いてゐる、

公子遂會晉人宋人衛人許人救鄭、

公子遂が晉人、宋人、衛人、許人に會して鄭を救つた、○傳は救つて及ばなかつたこと、また晋宋等諸國の卿の名を書かないことを説いてゐる、

夏、狄侵齊、

夏、狄が齊を侵した、○傳は無い、

した、

【一】 殺させた者は箕鄭等の徒である、

○毛伯衛來求金、非禮也、不書、王命、未葬也、

【通釋】 毛伯衛が魯に来て金を請求した、禮にかなはぬ事であつた、王命である、「春秋」に記録しないのは、まだ先王の葬禮が濟まないからである、

【二】 天子は私に財を求むべきでないためである、當時周室は衰微して葬禮の費用に事を缺いてゐるので、この使者派遣になつたのである、之を求むる者も非禮であるが、さきに公孫敖が幣物を私したのに拘はらず、更に使を周に遣はさない魯は更に非禮である、【三】 「春秋」に毛伯とのみあつて、王使といはないことをいふ、

○二月、莊叔如周、葬襄王、

【通釋】 二月、莊叔が周に往つて襄王の葬に會した、

○三月、甲戌、晉人殺箕鄭父、士穀蒯得、

【通釋】 甲戌の日、晉人が箕鄭父、士穀、蒯得を殺した、

【二】 皆、先克暗殺事件のためである、

○范山言于楚子曰、晉君少不在諸侯、北方可圖也、楚子師于狼淵、以伐鄭、囚公子堅、公子尨、及樂耳、鄭及楚平、

【通釋】 范山が楚子に言上して「晉の君は幼少の君で諸侯をどうしよう斯うしよう」と考へてをられませぬ、されば北方の國々を伐つて取りなさるべきかと存じます」といつた、楚子は狼淵に出陣して鄭を伐つて、公子堅、公子尨と樂耳とを生捕りにした、鄭と楚とは和睦をした、

【一】 范山は楚の大夫である、【二】 不在諸侯、諸侯の叛服に對して深く關心を有たぬことをいふ、即ち諸侯の行動を放任することである、【三】 師于狼淵、楚子自ら出陣したのである、杜註は楚子は狼淵に陣して聲援となり、別に軍を派して鄭を伐たせたのだといつてゐる、「春秋」に楚人伐鄭

とあるので、その解をなしたのである、しかし楚子自らをさして楚人といふ例がある、これをもそれによつて考ふべきである、【四】 公子堅、彤、樂耳は鄭の三大夫である、

○公子遂會晉趙盾、宋華耦、衛孔達、許大夫、救鄭、不及楚師、卿不書、緩也、以懲不恪、

【通釋】 公子遂が晉の趙盾、宋の華耦、衛の孔達、許の大夫と會して、鄭を救つた、楚の軍勢の引上げたあとで、間に合はなかつた、卿たちの名を「春秋」に書かないのは、これ等の行動が手ぬるくあつたためである、斯くして君の勤をなほざりに致すことを懲したのである、

【一】 「春秋」には晉人、宋人、衛人、許人とのみ書いてある、傳はその貶意を解説したのである、趙盾以下すべて卿の身分であるから、「春秋」に書くのが例である、【二】 不恪、恪は敬また謹である、不恪とは君命に對して勤恪を守らぬことをいふ、

○夏、楚侵陳、克壺丘、以其服於

晉也、秋、楚公子朱、自東夷伐陳、陳人敗之、獲公子蔑、陳懼、乃及楚平、

【通釋】 夏、楚が陳を侵して壺丘の地で打ち克つた、これは陳が晉に付き従つたからである、秋、楚の公子朱が東夷の方から陳を伐つた、陳人が之を敗つて、公子蔑を捕虜にした、陳は懼れをなして、そこで楚と和睦した、

【一】 鄭の地である、【二】 陳は戰勝つたといふものの、對手國が大國なる故に、その復讐に對して恐懼したのである、

○冬、楚子越椒來聘、執幣傲、叔仲惠伯曰、是必滅若敖氏之宗、傲其先君、神弗福也、

【通釋】 冬、楚の子越椒が魯に挨拶に來た、贈物の扱ひぶりがいかにも傲慢であつた、叔仲惠伯が「この人は必ず若敖氏の本家を滅すであらう、あの先祖の君

に對しての傲慢ぶり、あれでは、神はいかなることでも福を下しおかれまい」といつた。

【一】 子越椒は楚の大夫である、令尹子文の從子である、  
【二】 若敖氏は子越椒の先祖である、若敖の子は鬬伯比、その子は令尹子文と司馬子良である、子越椒は子良の子である、若敖氏の宗とは子文の家をさしていふ、  
【三】 傲、其先君、聘享には幣即ち束帛の贈物の上に璧を添へるのが例である、しかもその璧は先君傳來のもので廟に告げて之を受けるのである、然るに子越椒がそれを鄭重に扱はなかつた、これ即ち先君に對して禮を缺くことである、  
【四】 宣公四年楚が若敖氏を滅す記事の前書きである、

○秦人來歸僖公成風之襚、禮也、諸侯相弔賀也、雖不當事、苟有禮焉、書也、以無忘舊好、

【通釋】 秦人が來て僖公と成風の襚をおくつて來た、禮にかなふことであつた、諸侯が互に凶を弔し吉を賀する場合には、その折の間に合はずとも、禮にかなひさへすれば、記録する定めである、かくして舊好しみを忘れぬやうにとするためである、

【一】 襚は死者におくる衣をいふ、  
【二】 秦はもと中國同盟の國で無いから、赴告慶弔の制もなく、從つて延引して僖公の卒後九年、成風卒後六年の今になつて漸く襚をおくつて來たのである、しかし中國との交りを欲し、魯に通せんと思ふがために、僖公に追贈し、併せてその夫人にまで及したのである、故にその時に合ふ、合はぬを問題とせずして、意を掬んで禮にかなふとしたのである、  
【三】 不當事、事は斂、殯、葬をいふ、  
【四】 これを「春秋」に記録するのは子孫に傳へて舊好を忘れさせまいとの心づかひである、

〔經〕十年、春、王、三月、辛卯、臧孫辰卒、

十年、春、王曆三月辛卯の日、臧孫辰が卒した、○傳は無

い、文公が小斂に與つたので日を書いたのである、

夏、秦伐晉、  
夏、秦が晉を伐つた、○傳は秦の仕かへしであることをいつてゐる、

楚殺其大夫宜申、

楚がその大夫宜申を殺した、○傳は宜申の罪を説いてゐる、宜申は子西である、

自正月不雨、至于秋七月、

正月から雨が降らないで、秋七月まで續いた、○傳は無  
及蘇子盟于女栗、

蘇子と女栗の地で盟つた、○傳はその理由に就いて説いてゐる、

冬、狄侵宋、

冬、狄が宋を侵した、○傳は無い、

楚子蔡侯次于厥貉、

楚子と蔡侯とが厥貉の地に長い間陣を取つた、○傳は何故に然るかを説いてゐる、

〔傳〕十年、春、晉人伐秦、取少梁、夏、秦伯伐晉、取北徵、

【通釋】 十年、春、晉人が秦を伐つて少梁の地を取つた、夏、秦伯が晉を伐つて、北徵の地を取つた、  
【一】 少梁を取られた仕かへしである、

○初、楚、范、巫、喬、似、謂成王與子、

玉子西曰、三君皆將強死、城濮之役、王思之、故使止子玉、曰、母死不及、止子西、子西縊而縣絕、王使適至、遂止之、使爲商公、泓漢、沂江、將入郢、王在渚宮、下見之、懼而辭、曰、臣免於死、又有讒言、謂臣將逃、臣歸死於司敗也、王使爲工尹、又與子家謀弑穆王、穆王聞之、五月、殺鬪宜申及仲歸、

【通釋】 事のはじめ、楚の范邑の巫の喬似が成王と子玉、子西とに「お三方はどなたも御壽命でお亡くなりなさいませぬ」といつた、城濮の戦役に、楚王はこの事を思ひ出した、故に死なうとする子玉を止めさ

せるとて「死んではならぬぞ」といはせたが、間に合はなかつた。子西を止めさせた、その者は首を縊つたが繩が切れた、折よくも王の使が來合はせて、それなりにさせた。王は之を商邑の君とした、子西は漢水に沿ひ下り、更に江水を泝つて、郢に入り込まうとした、王が渚の御殿にゐたが、之を見下した、子西が懼れをなして辯解して「やつがれはお慈悲によつて命拾ひを致しましたところ、またも讒言を致す者あつて、やつがれ奴が他國に逃げ去るやうに申してをるとのこと、御思召のほどもいかなれば、いつそ御係りの手で御仕置を受けて死ぬる覺悟に御座います」といつた、王は子西を工尹とした、然るに子西は子家と共に穆王を弑さうと企てた、穆王が聞きつけて、五月に鬪宜申と仲歸とを殺した、

【一】 范巫、楚の范邑に住める巫である、巫は神子即ち祈禱を掌るみこである、職として、人間の未來を豫言する、【二】 強死、病氣によらずして死することはいふ、健康にして死する意である、非業の最期を遂げること、即ち自殺したり、殺害されて死ぬることを意味する、【三】 僖公二十八年に於ける晋との戦である、【四】 子玉は城濮の戦敗の責任者として

楚子から死を命ぜられた、楚子は命じておいたが、その言を想起して止させようとしたのである、この顛末は同じく僖公二十八年の條に見えてゐる、【五】 懸絶、縣は懸繩である、首を縊る繩が斷ち切れて、意外に一命をとりとめたのである、【六】 商公、商は楚の邑である、爲商公とは子西を封じて商公としたのである、子西は遠隔の地に左遷されたわけである、【七】 漢水の流に従つて下り、漢水が江に合するところから、江の上流を目ざして上つたのである、【八】 郢は楚の都である、それに入らうとするのは、兵を擁して攻め入らうとしたのである、さきに死を命ぜられたこと、後助命されたにしても左遷されたことを怨んで、弑を謀つたのである、【九】 渚宮、江に臨める宮殿である、【一〇】 子西の郢に入るのは、暗に入つて急に君を弑しようとしたが、突然見つけられて、事の露顯をおそれたのである、【一一】 臣歸死に於司敗、司敗は他國の司寇である、楚と陳は此の名を以て稱してゐる、法官である、君に背いて駈落するなどいふ汚名を蒙るよりは進んで法官の手にかかつて清き死を遂げようといふのである、これが郢に來つた理由である、と虚辭を申し述べたのである、【一二】 王はこの言を信じ、子西を工尹にしたのは、その左遷を解いて都に留めさせたのである、工尹は百工を掌る官である、【一三】 鬪宜申は子西である、仲歸は子家である、【一四】 かくして范巫の言は當つた、

○秋七月、及蘇子盟于女栗、頃王立故也、

【通釋】 秋七月、蘇子と女栗の地で盟つたのは、頃王が新に立たれたからである、

【一】 蘇子は周の卿士である、この子は子爵の意でない、廣い意味の敬稱である、この蘇子は僖公十年の條に見える温子即ち子爵たる温の君である、狄に國を滅されて衛に奔つたが、その後王に取り立てられたのである、【二】 蘇子と盟つたのは文公でない、魯の大夫である、【三】 頃王が新に立つて諸侯と親を結ぶためである、

○陳侯鄭伯會楚子于息、冬、遂及蔡侯次于厥貉、將以伐宋、宋華御事曰、楚欲弱我也、先爲之弱乎、何必使誘我、我實不能、民何罪、乃逆楚子、勞且聽命、遂道以田孟諸、宋公爲右孟、鄭伯

爲左孟、期思公復遂爲右司馬、子朱及文之無畏爲左司馬、命夙駕載燧、宋公違命、無畏扶其僕以徇、或謂子舟曰、國君不可戮也、子舟曰、當官而行、何彊之有、詩曰、剛亦不吐、柔亦不茹、母縱詭隨、以謹罔極、是亦非辟、疆也、敢愛死、以亂官乎、

【通釋】 陳侯、鄭伯が楚子と息の地に會した、冬、楚子はそれからすぐに蔡侯と厥貉の地に長い間陣を取つた、かくて宋を伐たうとした、宋の華御事が「楚はわが國を降服させる積りで御座れば、いつそ此方から降服致すべきで御座らう、何も向うに誘き出されて戦ふまでも御座らぬ、とりわけて我が國ではとても及びもつかぬこと、御座る、何の罪咎もない民どもに戰の憂目は見せたらう御座らぬ」といつた、そこで

楚子を出迎へて、出軍の勞れを見舞ひ、なほまた下知を受けることになつた、それからすぐに案内して孟諸の地で狩獵をした、宋公が右孟となり、鄭伯が左孟となり、期思公の復遂が右司馬となり、子朱と文之無畏とが左司馬となつた、朝早く車に馬を掛けおき、燈火の支度をして「おけ」といつた、宋公が下知に背いた、無畏がその從者を撻つてその罪を人々に觸れ知らせた、或人が子舟に對つて「國君を罰するとは不都合と存する」といつた、子舟が「職責もて處置する以上、權威者たりとも用捨は致さぬ、詩にも『剛き物をも吐き出すなく、柔き物をも食ふことなし』とも『おもねり業をばゆるすなかれ、はてしなき邪しま事を戒めよ』と申すのも、權威者を避けることでは御座らぬ、命が惜しいとして役目を亂しては相成らぬ儀で御座る」といつた、

【一】 杜註はこの時陳侯鄭伯と宋公麋子も同じく陣を取つてゐたが、書かなかつたのだといつてゐる、宋鄭陳は楚に下部扱ひをされて諸侯としての格を失し、麋子は逃げ去つたことを理由としての解である、孟諸の出來事を混淆した曲解であらう、【二】 華御事は華元の父である、【三】 欲弱我、

弱は我みづから弱と認めて降服することである、【四】 誘我、我を戦に誘き出すことをいふ、【五】 宋の大藪である、【六】 右孟、左孟は狩獵する時の陣の名である、【七】 期思公は楚の期思邑の公である、【八】 狩獵をする時は兩甄とて左右に翼陣を張るので二人の左司馬を置いてこれを掌らせ、右司馬一人は中央を掌るのだと杜註にいつてゐる、【九】 早朝の出發に手ぬかりの無いやうに命じたのである、燧即ち火打道具を載せておけるとは、まだ夜の暗いので、燈の支度をしておけるとのことである、【一〇】 扶其僕、扶は答で撻つこと、流石に宋公を扶つことが出來ないので、代りに僕者を罰したのである、【一一】 子舟は無畏の字である、【一二】 彊は國君の權威をさしていふ、【一三】 大雅烝民篇中のもので、詩句は仲山甫が彊を畏れぬことを賞美したのである、烝民の第五章にいふ、人亦有言、柔則茹之、剛則吐之、維仲山甫、柔亦不茹、剛亦不吐、不侮矜寡、不畏彊禦、その意は、軟かなれば之を食ひ、堅ければ之を吐き出すと、世の人はいふものの、仲山甫こそは軟かなるも食はぬやうに、はかない者をも侮らず、堅けれど吐き出さぬやうに強き者をも畏れぬ者なれといふことである、茹は食である、【一四】 大雅民勞篇中のもので、詭隨は、偽つて人の意に隨ふ者、肚の中ではさうでは無いと思ひながら、媚び諛つて、表には肯き顔をすることをいふ、これは小悪なれどなほそのままにさし

許さないのが、無縱詭隨である、罔極は無極である、無極の姦惡をいふ、謹は慎戒の意である、【一五】 宣公十四年宋人が子舟を殺す記事参照。

厥貉之會、麋子逃歸、

【通釋】 厥貉の會に麋子が逃げ戻つた、【一】 楚の屬國である、麋國の君である、楚の壓迫に堪へかねて逃げ去つたのである、明年楚子が麋を伐つ事の前書きである、

(文公上終)

春秋左氏傳國字解一終



漢籍國字解全書略目一覽 (全卅六卷)

第一	孝經	熊澤蕃山	第九	老子	山本洞雲	第二	韓非子上	松平康國
第一	大學、中庸、論語	中村惕齋	第十	孫子	毛利貞齋	第三	戰國策上	松平康國
第二	孟子	中村惕齋	第十一	唐詩選	太田立九	第四	戰國策中	牧野藻洲
第二	帝範、臣軌	市川鶴鳴	第十二	古文眞寶前集	荻生徠	第五	戰國策下	牧野藻洲
第三	朱子家訓	講者不明	第十三	古文眞寶後集	服部南郭	第六	文章軌範	松平康國
第三	易經上	眞勢中	第十三	續編(十五卷)	林羅山	第七	續文章軌範	松平康國
第三	易學階梯附言	眞勢中	第十三	禮記上	桂湖村	後編(九卷)		
第四	易經下	眞勢中	第十四	禮記下	桂湖村			
第四	本筮指南	谷川順祐	第十五	管子下	菊池晚香			
第五	詩經	谷川順祐	第十六	管子正	菊池晚香			
第五	詩疏圖解	淵景山	第十六	管子補正	猪飼敬所			
第六	書經	大田錦城	第十七	墨子下	猪飼敬所			
第七	小學	中村惕齋	第十七	墨子上	猪飼敬所			
第七	童子通	山本蕉逸	第十八	荀子下	牧野藻洲			
第八	近思錄	山本蕉逸	第十九	荀子上	牧野藻洲			
第八	用字格	伊藤東涯	第十九	荀子考異	桂湖村			

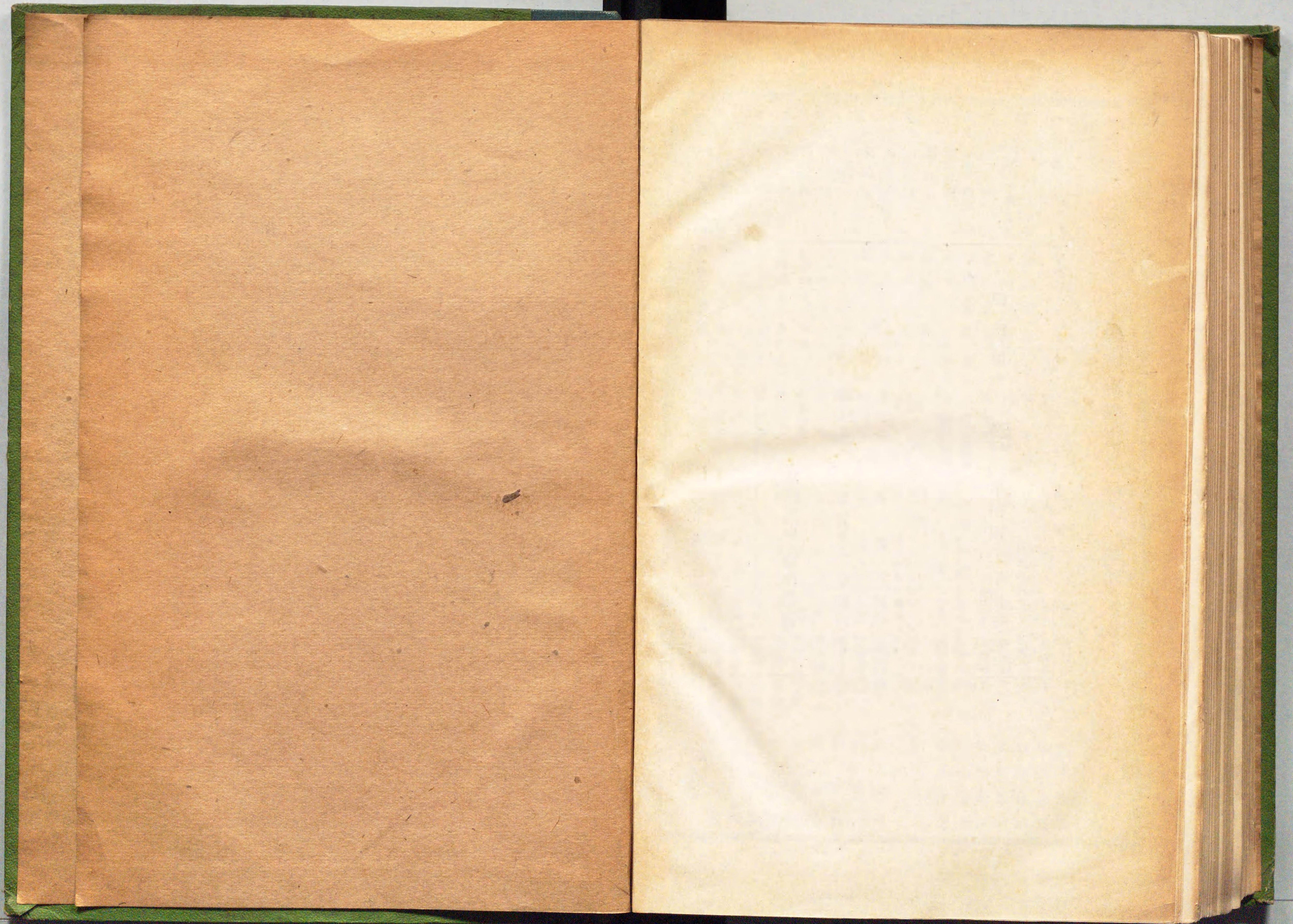
昭和七年七月二日印刷  
昭和七年七月五日發行

(漢籍國字解全書第卅三卷)

編輯者 早稻田大學出版部  
代表者 武田尾吉  
印刷者 五十嵐良晃  
發行所 東京 早稻田大學出版部  
復製 不許

日清印刷株式會社印刷

振替東京一三三番  
電話牛込三四五番



555  
14

